

04・展望台デート（素敵な女性とは、細かな点にまでよく気が付くものである）

03の翌日。一月十六日（木）十二時ごろ。

すずらん市汐見台。

天気は晴れ。気温は二度程度。比較的暖かい。

昨日降り積もった雪も、プラス気温に戻った事で、かなり溶けてしまった。非常に歩きやすくなっている。

運転もしやすい。ありがたい！

場所は、青柳家の自家用車内。

主人公の祖父『青柳 辰雄（あおやぎ たつお）……今後はおじいちゃんと呼ぼう。の、所持する、ドイツ製の、暗い茶色のクラシックカーだ。

主人公は今、おじいちゃんからこの車を借りて、自宅を出発したところだ。

マニュアル車を運転できる事は、主人公の数少ない自慢なのである。

ちなみに昨日、おじいちゃんは友達と遊びに行っていて、十五時ごろは不在だった。今日もどこかに行くらしい。

孫よりもはるかに友達の多い、アクティヴなおじいちゃんなのである。

ところでこの車……正直、この田舎にはそぐわぬほどかつこい。
浮きまくりである。

まったくもう、おじいちゃんってばおしやれさんで、それ以上に超のつく目立ちたがり屋さんだからね。

主人公、そんなおじいちゃんの車を運転しながら、二十年ほど前に憧れた、というか今も大好きな女性ミュージシャンの事を思い浮かべる。

彼女は当時、車のCMに出演していた。

それは彼女が大型のSUVに乗ってレジャーに出かけまくるという、ややウエイな感じのCMシリーズだった。

当時、車には特に興味のなかった主人公だったが、このシリーズは好きだった。

そして思った。『大人になったら、彼女みたいに、格好よく車を乗りこなせる女になるのだ』と……。

かくして主人公は免許を取得した。実に単純である。

まあ、最近久しぶりにこのCMを見たら、実はこのシリーズにおいて彼女は一切運転しておらず、すべて助手席設定だった事が判明したんですね……。『わたしの記憶は適当』。つまりこれはそういうエピソードですね。

つまり、わたしの本当の夢は、助手席に乗ってどこかへ出かける事だったのかな。誰と？
多分、すごく好きな人と。

それでも主人公のやる事は変わらない。マニュアル車を乗りこなしてやるのみだ。で、なぜ今、主人公が車を運転しており、どこへ向かっているのかと言うと……。

※音声ここから※

SE1 主人公の車の環境音

【0—10秒ほどまで流してSE2】

SE2 主人公の車が停車する音

【最初から最後まで流す】

目的地は、青柳家から公園をぐるっと迂回した位置にある小湊家だ。

主人公はそこで待つ唯為理と、その従姉である『小湊 佐智（こみなと さち）』を迎えに来たのである！

こうして主人公が小湊家に到着すると、窓からのぞいていたのだろう。唯為理と、佐智と思しき若い女性が、すぐにこちらへ向かって走ってくる。

昨日、唯為理は『自分たちが青柳家に行く』と言った。

だが、どうせ車に乗ってどこかに行くなら、主人公が小湊家に迎えに行く方がスムーズである。

なので、こうなった。

それから、先に寄るところもあったんだよね。スーパー行ってたの。

目的のものがスーパーで手に入ってよかったですよ。

あとね、ついでにガチャも回した。昨日は結局スーパーには行けなかったからね。

SE3

車の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

※声は外から、少しだけ遠くから聞こえる

〈佐智〉

「ヤンキーっぽいが、礼儀正しく好感が持てる口調で」
「こんにちは！ 今日にはよろしくお願いします」

「【ものすごく緊張している】

こんにちは！ わざわざ来ていただいてすみません」

〈主人公〉

「こんにちは、二人とも。こちらこそ今日はよろしくね」

主人公、二人に向かって、にこやかに挨拶する。

うん。いい感じだ。

「かっこいい車の運転席に座ると、運転手にはフィールド効果的なバフがかかるに違いない。」

SE 4 唯為理と佐智が車に乗り込む音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

SE 5 車の扉が閉まる音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

SE 6 車のアイドリング音

【最初から流す】

【その後、規定の位置まで流し続ける】

【小さめの音量で流す】

ここで車はすぐに発進せず、三人の会話が始まる。
まずは、佐智が自己紹介をする。

〈佐智〉

「ヤンキーっぽいが、礼儀正しく好感が持てる口調で」
どうも初めまして。

唯為理（ゆいり）の従姉（いとこ）の、小湊 佐智（こみなと さち）です。
橋の向こうの病院で、看護師やっています。

今日はあたしまで乗せてもらっちゃってすみません」

そう。佐智こそが昨日唯為理の言っていた『主人公にお礼をしたがっている従姉』なのである。

主人公、そんな佐智の挨拶を聞いて、

よかった！ 佐智さん、感じのよさそうな人だ！

と、ひそかにホツとする。

佐智は、見た目こそヤンキーっぽく見えるが、口調はハキハキとして落ち着いており、
なんだか仕事ができそうな雰囲気である。

そう。田舎めの病院に行くと会える『一見怖そうだけど、テキパキしてて、患者とその
家族への対応もいいナース』って感じの女性だ……。

と、主人公は思う。

そして佐智もまた、主人公と似たような事を考えている。

〈主人公〉

「初めまして。青柳のおばあちゃんの孫です。

こちらこそ、いつもうちのおばあちゃんがお世話になってます」

〈佐智〉

「主人公が感じのいい女性なので嬉しい」

へへ。よろしくっす」

そうか、この人が噂の『青柳さんちのお姉さん』なのか。

そうか。そうかそうかそうかー！

まあ個人的には、おそらく青柳のじいちゃんのものであるう、おしやれな車に乗って現れたこの女性が……。

自分が唯為理の話を聞いて思い浮かべたイメージ図とは、随分違うのが気になるところ

だが。

佐智、思う。

今佐智の隣に座っている佐智の従妹は、素直で真面目ないい子だ。

彼女は遠方に住んでいるため、去年、十年ぶりくらいに会ってそれから今日に至るが、その印象は変わっていない。

……だが、彼女は話を大げさに盛りがちというか、物のたとえかたが妙だ。

そのせいで、いまいち情報が正確に伝わらないところがある。

あと、浮かれたり、混乱したりすると、基本的な情報を拾ってくるのを忘れる。

そのせいで今、唯為理と、佐智と、二人のおばあちゃんの三人は『助けてもらったのに、青柳のお姉さんの正式名称を知らない』という危機的状況にあるのだった。

とりあえず苗字が青柳ではない事は知っている。母方の孫と聞いているからだ。

おばあちゃんは『苗字は確か**』と言っていたが、間違えていたら危険すぎるので呼べない。

だから佐智は主人公の事を『お姉さん』と呼ばざるを得ないのだった。

アホである。この従妹は。

そのほか、唯為理のうっかりは枚挙にいとまがない。

実際昨日も、佐智は話を聞きつつ『これじゃ、なんもわかんねーな』と思ったのである。だから、今日こうして直接会ってみる事にしたのだが……。

という事で、どんな感じなんすかね！ 唯為理のお氣に入りのお姉さんはさ！

〈主人公〉

「佐智さんは、西町（にしまち）に行きたいんだっけ。まずはそっち行こうね」

〈佐智〉

「『そつす』は『そうです』という意味」
そつす。

今日車、実家置いてきちゃったんで助かります。

西町（にしまち）の信金（しんきん）で降りして下さい」

佐智、嘘はついていないが、実際は慌てて西町に行くような用事などない。

今日は、唯為理がすっかり夢中になっている『青柳さんちのお姉さん』がどのような女性か知りたくて、無理やりついてきたのだ。

まあとりあえず、言わねばならん事を言わねば。

〈佐智〉

「これまでより少し真面目なトーンで。きちんとお礼を言う」

あの、昨日は唯為理がホントお世話になりました」

〈主人公〉

「ああ！ とんでもない。当然の事をしたまでです」

ほお！ 爽やかなお姉さんじゃねえか！

佐智、主人公のリアクションに、ますますテンションが上がる。

主人公はこのリアクション、このセリフ自体を『し慣れている』『言い慣れている』ような雰囲気だ。

佐智、『これは人助け慣れしてるやつだな……！』と感じる。

〈佐智〉

「心から褒めている」

いや、なかなかできないですよ。

「一呼吸おいてから。唯為理が会話に入れずにいるので、話を振る」
ねー唯為理？」

唯為理、突然話を振られて驚くが、会話に入れて嬉しい。

「内心『ありがとうさっちゃん!』と思っている」
うん!

「だが、せっかく話を振ってもらったのに、上手い事が言えない。
すでに何回も言っている事の繰り返しになってしまう」
ほんとに。その節はありがとうございましたっ」

〈主人公〉

「ふふ。どういたしまして。じゃあそろそろ発進しましょうか」

〈佐智〉

「発進しないまま話し込んでいた事に気づく」

はい。じゃあ、そろそろ行きましようか！」

SE7 車が発進する音

【最初から最後まで流す】

【SE6から切り替わるように流す】

【その後、SE8と切り替える】

SE8 主人公の車の環境音2

【SE1と同じ音】

【最初から最後まで流す】

【その後、規定の位置まで流し続ける】

こうして車は動き出したが、佐智は非常に機嫌がいい。

佐智はヤンキーではないが相当なヤンキー気質で、とにかく身内意識が強いタイプだ。だから、可愛い従妹がご執心の女性がどのようなやつかと、おせっかいなほど気になっていた。

具体的には、もしも『青柳のお姉さん』がおかしなやつだったら、速攻二人を引き離し

てやるつもりだったのだ。

我ながらこの考えが過激で、攻撃的すぎる事はわかっている。

だけど今は、普通の状態じゃないのだ。

だってこの従妹は、昔からとにかくドラマチックな展開に弱い。

『困っているところを助けられた』なんて。助けてくれた相手に、即行好感を抱きまくっているに決まっている。ていうか抱きまくっている。

……だから『あんな女』に付け入られた。

自分は『あの件』と同じ事を、目の前で繰り返させるわけにはいかないのだ……。

でも、この人はなんかよさそうな気がする！

あたし、人を見る目はある方だと思ってんだよね！

この調子なら、唯為理の『あれ』を見ても、大丈夫なんじゃないかな。

いや、これはあたしの願望か……。どうか大丈夫であってくれ……。

〈佐智〉

「【急にフランクになる。ここまで礼儀正しくしていたが、とうとう我慢できなくなった。】

『いい意味で、聞いてたのとだいぶ印象違う』ので、声が弾んでいる」
てかお姉さん、なんか聞いてたのとだいぶ印象違いますね」

〈主人公〉

「はい？」

主人公『わかっていなさそう』なふりをして答えるが、心当たりはありすぎる。

きみねえ、きみの言いたいことあねえ、大方わかっているんだよあたしはよお。
頼むよ。

忘れてくれ！ 昨日の格好は！

〈佐智〉

「【テンションが上がっている】

あの人に似てますよね！ お酒のCM出てる女優さん。

【少し間をあけてから。隣に座ってる唯為理を冷やかす】

えっヤバいじゃん唯為理。お姉さん美人じゃん」

……ん？

おいおい、きみい。それじゃ全然わからんぞ。

お酒のCMに出てる女優さんが、何人いると思ってるんだあい？

主人公、そうは思いつつも、つつい『ふへっ』とニヤついてしまう。

佐智が気を遣って、相当甘めに言ってくれている事はわかつている。

それでも『女優さんに似ている』と言われて、悪い気はしない。ていうか嬉しい。

い、一体誰の事かしら……。

「【申し訳なさそうに。フランクすぎる佐智の態度をたしなめる】
さ、さっちゃん」

〈佐智〉

「【まったく気にしていない。これを話したくてしょうがない】
聞いて下さいよお姉さん。

【『ずっと』の『っ』に力を入れる】

唯為理昨日からずっ、とお姉さんの話ばっかなんすよ。

「ここから※マークのセリフ終わりまで、昨日、唯為理にされた話を、主人公にも伝える」
道で気分悪くなったら、散歩中の人が気づいてくれて。

でも服のせいで男か女かよくわかんなくて。

『えっ何？ 何？』って思ったら帽子脱いで。

そしたら優しい女の人が入ってて！

手え引いて公園まで連れてってくれて、

『すごい素敵だった！』を、少し芝居がかった感じで大げさに」

『すごい素敵だった！』って、ずっと言ってる」※

えっ！

主人公、思わず顔が真っ赤になるが、至って落ち着いているふりをして運転を続ける。

これがもし昨日と同じ服装だったら、相当面白い光景だった事だろう。

白くて丸いお菓子が、真っ赤に照れ、いい焼き加減になって、車を運転しているのである。

「恥ずかしさで声が震える。それでも声が小さい。真っ赤になっている」
さっちゃん、やめて……！」

〈佐智〉

「楽しんでる。唯為理の抗議を無視して続ける」

だからあたしそれ聞いて、てつきりもつとガツチリ系の人を想像してたんすけど。
てか、うちのばあちゃんも『白い雪だるまみたいな格好の人が送ってくれた』って言う
てたから。

もう『何が来たの?』って感じだったんすけど。

「すごく嬉しい。すっかり安心している」

なんだ。綺麗なお姉さんじゃないっすか」

〈主人公〉

「あはは。それはどうもありがとう」

……おうよ。それっすよ。今日は少なくとも当社比で綺麗じゃなきや困んのよ、あたし。

そう。主人公、今日はばっちりメイクをしてきた。

服装も当然、マシユ……とか、ミシユ……とか、ベイ……を連想させる感じではない。

一昨日、実家からすずらん市に来る時に着てきた、普段のスタイルである。

しかし、昨日は部屋着・雪だるまみたいな姿で汐見台をうろろしていた女が、今日は『あれはなかった事にして下さい』と言わんばかりに、おしやれを決めてきた。

これは、かえって面白い光景のような気がしないでもない。

……が、かといってまた手を抜くわけにはいかない。

そもそも『すずらん市にいる時はめんどくさいから、あんまメイクとかしたくない』などと思っていたから、あんな事になったのだ。同じ轍は踏むまい。

ていうか奥平さんも、昨日はあんな人——つまりわたしですが——が突然現れて、よく逃げなかったなと思う。

つまり……逃げられないくらい弱っていたか、恐怖を感じていたのだ……。

主人公、運転しながら、唯為理を不憫に思う。

唯為理は隠したがっているようだが、唯為理はあの時、明らかに何かに怯えていた。今日佐智が付いて来たのも、この事が関係しているような気がしてならない。

これは……この人達には……なんかある気がするぞ……。

そう。主人公はこれまで、探偵ものにも、幾度となく憧れてきている。

最近は、お面をかぶった現場主義の探偵ガールに夢中だ。

だから、つい何かと推理してしまうし、この二人の様子にも、どこか不穏なものを感じずにはいられないのだが……。

うん。だから、本当なら『危険な感じだから関わらないどこ。職業の件もあるし』なんて選択肢だつて、あつた。はずなんだけど。

……なんかできなかった。奥平さん可愛かったから。

それに、あんな風に『会いたい』つて言ってくれる人、今のあたしにはいないから……。

と。そんな事を考えていると。

〈佐智〉

「ドキドキしながら、一番聞きたかった事を聞く」

あの。うちのばあちゃんから聞いたんすけど。

お姉さんつて今、お仕事辞めたばっかでお休み中なんすよね？

【『どの位』が『どん位』になる】

こっちはどん位いるんすか？」

ん？ えっ。もうそこまで話広まってるの？

主人公、佐智の言葉に驚く。

当然これは、佐智にも、唯為理にも話していない事だからだ。

おい。推理するまでもなく犯人は一人しかいねえぞ。

ババア！　しゃべりすぎだ！

……まあ、何で辞めたかまでは言っていないと思うけど。

というか、おばあちゃんたちにも、そこまではしゃべってないし。

〈主人公〉

「うん。特に決めてないんだけどね。まあしばらくいよっかなと」

主人公、思わぬ情報漏洩に焦りつつも、正直に答える。

つつい『ババア！』などと呼んでしまうが、おばあちゃんは『汐見台には、好きなだけいればいい』と言ってくれている。

主人公はそれがとてもありがたいし、もう少しだけ、その厚意に甘えまくっていたいの

だ。

〈佐智〉

「声が弾む。『これなら唯為理にもチャンスがあるかも!』と思う」
マジっすか。

「ちよつとドキドキと。まるで、自分が主人公をデートに誘いたいような口調で」
じゃあ、結構暇な感じですか?」

「【恥ずかしさのあまり、悲鳴のようになる。それでも声が大きくない】
さっちゃん。そういうのは自分で聞くから」

〈主人公〉

「あはは。暇暇。特にやる事もない感じ。あ、見えて来たね、信金」

〈佐智〉

「【自分の事のように嬉しい】
マジっすか。」

【唯為理を応援する】

よーし頑張れよ唯為理。

【近くの、車を止めやすいところを指して】

あ、この辺で大丈夫です。あそこで降りして下さい」

〈主人公〉

「承知しました」

主人公、真っ赤になりながらも返事をする。

そして車は、佐智が指定した位置に停車する。

SE9 車が減速し、停車する音

【SE2と同じ音】

【最初から最後まで流す】

※ここでSE7が止まる※

SE10 車のアイドリング音2

【SE6と同じ音】

【最初から流す】

【その後、規定の位置まで流し続ける】

SE11 佐智が車の扉を開ける音

【SE3と同じ音】

【最初から最後まで流す】

〈佐智〉

「主人公に対して。自分の事のように嬉しい」
ありがとうございます！

【唯為理に対して。ひそひそと】

んじゃ唯為理、応援してるぜー？

【唯為理に対して。元の声の大きさに戻る】
また後でね！」

SE12 佐智が車の扉を閉める音

【SE5と同じ音】

【最初から最後まで流す】

※ここでSE10が止まる※

SE13 再び車が発進する音

【SE7と同じ音】

【最初から最後まで流す】

【SE12と切り替わるように流す】

【その後、SE14と切り替える】

SE14 主人公の車の環境音3

【SE1、8と同じ音】

【最初から最後まで流す】

【その後、規定の位置まで流し続ける】

8秒ほど沈黙。

佐智、こうして去っていく。

車内には、赤面している主人公と唯為理だけが残される。

「ものすごく恥ずかしい。それから、申し訳なさそうに」
すいません……さっちゃんが変な事ばかり言って……」

〈主人公〉

「ああ！ とんでもない。大丈夫だよ！

奥平さんと佐智さんって、すごく仲がいいんだね」

主人公、思わず無口になりかけるが、『このままではいけない！』と、慌てて話題を変
える。

唯為理、そんな主人公の優しさにホッとする。

乗車してから、ずっと膝に大切に乘せている、大きめの鞆を抱きしめる。

「少しホッとする。主人公が気にしていないようで安心している」
そうなんです。

私、住んでるところ、すごく遠いんで。

さっちゃんと会ったのも『去年十年ぶりに』とかなんですけど。

【そんな優しい佐智の事を思うと嬉しくなる】

すごく仲良くしてくれて……。

忙しいのに、よく会いに来てくれるんです」

……んん？　なんか妙だな？

具体的に『どこが妙だ』とはうまく言えないんだけど……。

主人公、唯為理の説明にどこか違和感を覚えつつも、そのまま話を聞く。
対する唯為理もまた、説明不足であった事に気づく。

【説明不足だった事に気づいて、補足する】

あ。

【少し間をあけてから】

うち、去年の末におじいちゃんが亡くなりまして……おばあちゃん一人になっちゃって。
て。

そのお葬式で、私は十年ぶりにずらん市に来たんです。

それから、式の後も居させてもらってます。

それで、さっちゃんはずっとこっちに住んでるので。

よく会いに来てくれてるんです」

しかし、補足されても、なお……この話はどこか妙である。

〈主人公〉

「そうなんだ。あ、だから実家に車置いてきたって言ってたんだね。佐智さんは、ご実家と青柳さんちを、行き来してるってわけだ」

「【会話が弾んできたので嬉しい】
そうです。」

「『これは佐智のおかげだ』と思うと、胸がじーんとなる」
「すごく優しいん、です。」

「さっちゃんのお陰で、私何とかやってけてます」

主人公『それはいい話だなあ』と思いつつ、やはりどこか腑に落ちない。
なぜ、唯為理は本来遠くの地域に住んでいたのに、お葬式があったとはいえ『去年の末から一月中旬の現在』に至るまで、ずっとずらん市で暮らしているのだろう。
そして佐智は、そんな唯為理を『とても気にかけている』のだろう……？

対する唯為理『今日絶対言わなくてはならない事』を言うために、一度スマホの画面を見る。

とはいっても、これはカンペではない。

勇気を出すためのお守りだ。

唯為理、ロック画面にしている、とある画像をじっと見てから、思い切って口を開く。

「少し間をあけてから。ドキドキと切り出す」

あ、あの。

「少し間をあけてから。『言おうと思ってたんですけど』の途中までを言う」
さっきから言おう

【緊張で声が小さくなる】

と、思ってたんですけど……。

【少し間をあけてから。すごく緊張しつつも、思い切って言う】

私の事は唯為理でいいです。

皆そう呼ぶんで。下の名前で、お願いしますっ」

唯為理、緊張で死にそうになりながらも、

最後まで言えた！

と、達成感に満たされる。

そうだ。自分にだって言えるのだ。

私の事を手伝ってくれようとする、さっちゃんの気持ちは嬉しい。
でも、それに甘えてちゃだめだ。

だって自分の事だから。

自分の事さえ、周りに助けてもらわなくちゃできない人なんて、きっと魅力的じゃない。
少なくとも、大人の女性としては見てもらえない気がする。

それは、困る。

だって、私は……。

対する主人公、唯為理の思わぬ提案に驚く。

あらそお？

まあ確かに無意識とはいえ『奥平さん』と『佐智さん』って呼び方の組み合わせは変だ

よね。

とは言っても、いきなり呼び捨てっていうのも気が引けるな。
それじゃあ……。

その時、ちょうど赤信号で車が止まる。

〈主人公〉

「……じゃあ、唯為理ちゃん？」

そして主人公が、優しい声でそう呼びかけると……。

「ものすごくときめく。名前を呼ばれてすごく嬉しい」

はい……！

【少し間をあけてから。すごく嬉しい】

じゃあ。ゆ、唯為理ちゃん、お願いします……！」

唯為理、ときめきで息が止まりそうになる。

また主人公は前を向いて、運転に集中してしまうが、今度は、ハンドルを握るその白い

手に目が行ってしまう。

……うん。

もうバレバレだろうけど、一目ぼれだったのだ。

あの日、座り込んでしまった私の肩に、あの手が触れて……。

初めて主人公さんの姿を見た時から、私はこの人を大好きになってしまったのだ。

でも、さっきは私がうまく話せなかったせいで、誤解を招いた気がする。

だって私は、主人公さんの事を『美人だと思ったから』また会いたいと思ったわけじゃない。

私は、主人公さんの顔を見る前からドキドキしていた。

男性かも、女性かも、若い人かも、お年寄りかもわからない時から、ときめいていたのだ。

信じてもらえないかもしれないけど……本当にそうなのだ。

唯為理、昨日の主人公の格好を思い出す。

……確かに、正直、あの格好は不思議だった。

着こみ過ぎて、宇宙服みたいだった。

歩くのも大変そうで、実際大変だったと思う。

でも、走ってきてくれた。

肩で息をしながら、まともに返事もできない私に、何度も声をかけてくれた。助け起こして、安全に休める場所まで連れて行ってくれた。

きつと、あんまり人に見せたい格好じゃなかったと思うのに、当たり前みたいに『送っていく』って言うてくれて、本当にそうしてくれた。

こんなの、されたのが私じゃなくても、好きになっちゃうと思う。

さっちゃんとは昨日私に『確かにいい人だと思う。でも、それだけで決めるってのは、情報少なすぎない？』って言った。

その通りだと思う。

主人公さんがどんな人か全然知らないのに、知らない部分を想像で埋めて、一人で勝手に盛り上がっているのは、おかしいし……。

主人公さんの事なのに、主人公さんの事を無視しているようで、失礼だと思う。

だから私は、おかしくて、失礼な事だとわかっていて、ここまで自覚しているのに、今、

止められなくなっている。

衝動にまかせて『会いたいです』なんて言っ、自分の気持ちに、この人を巻き込もうとしている。

なんて迷惑なんだろう。『私はそんな事しちゃいけない』のに。

迷惑なのに。迷惑をかけるのに。

でも少しだけ。この人がすずらん市から、地元へ帰ってしまうまでの短いあいだなら――
――。

〈主人公〉

「そういえば、今日はお昼ご飯と一緒に約束だったよね。

どこで食べる？

って言ってもこの辺、選択肢あんまないけどさ。

唯為理ちゃんの行きたいところで。

特になければ、私がどこかご案内するよ」

唯為理、ここで主人公に話しかけられて、ハツとする。

そうだ。主人公がいるのに黙っているなんて！

「声をかけられて『ハッ!』とするが、うまく話せない」
あ。

【少し間をあけてから。何とか勇気を出す】

お昼。なんですけど。

【自信なさげに。『けど』で声が小さくなる】

私。お弁当作ってきたんです」

なにっ！

〈主人公〉

「え!?! ほんと!?! 食べたい!」

主人公、思わぬ展開が嬉しくて、思いっきり食いつく。

まさかそこまでしてくれているとは思わなかった。

てつきり佐智を送った後、近くの店で食事をするのだろうかばかり思っていたのだ。

対する唯為理も、嬉しくてたまらない。

正直に言うと、料理は好きだし、それなりに得意だと思っている。

でも、今日は了承を得ないまま、ほとんど勢いで作ってしまったから、喜んでもらえるかわからず、不安だったのだ。

……というか、今朝、お弁当箱を見た佐智は青ざめていた。

何か言われる事はなかったが、あれは完全に『初デートつつうか、初めてゆっくり話す人に手作り弁当渡すとか、正気か……?』という顔だった。

だが、すでに完成してしまっている以上、もう止める事もできなかったのだろう。

精一杯『うまそうじゃん!』とひきつり笑いを浮かべる佐智は、内心『あと一時間早く起きて、何としてでも止めるべきだった』『今からでも止めるべきだろうか』と欲求不満に違いない。

だから唯為理は、主人公の、予想外すぎるほどに温かいリアクションに、このまま喜ぶところだったのだが……。

その時、唯為理の目に『とある光景』が目に入る。

『そこにあるはずだったもの』が見当たらず、更地になっており、真っ青になる。

え……? あれ?

うそ……。

唯為理、口をぽかんと開けながら、みるみる涙目になっていく。

どうしようどうしよう。どうしよう……。これじゃあ……。
もう『作ってきた』って言っちゃったのに……！

7秒ほど間。

〈主人公〉

「ん？ どうした？」

【慌てて返事をする】

あつ、すみません……！」

どうしよう。今通り過ぎたところにあったはずの『すずらん市文化センター』が……。消えてる。

あそこでなら自由に飲食できるところがあるから、そこでお弁当を広げようと思ったの

に……。

どうしよう。十年も前の記憶を頼った自分が間違っていた。

事前にさっちゃんかおばあちゃんに相談しておけば、こんな事にはならなかったのに……。

【泣きそう】

あの。私。この辺にお弁当広げて食べられる所、あると思ってたんですけど。

【正直、わけがわからず、疑問形になる。また、混乱で涙声になる】

な、何（なん）か、今通ったら、なくなってる？」

主人公、唯為理の言葉にピンとくる。

あ、なるほど。十年もこの土地に来ていないと、こういう事があるのか。

〈主人公〉

「あー、今通り過ぎた文化センターの事かな？ あそこ去年取り壊しちゃったんだよね」

【泣きそう。『すずらん市文化センター』を、『市』を抜いて少し略して言う】

そうです。すずらん文化センターです。

【少し間をあけてから】

取り壊しちゃったん、ですわね。

【消え入りそうな声で】

すいません。私勘違いしてました。

【泣きそう。『お弁当の事は忘れて下さい』と言いかける】

ほんと、すいません。お弁当はやめて……」

主人公、唯為理が心配になる。

ほんの小さなミスをしただけなのに、唯為理はほとんど泣きそうな声をして、まるで重罪を犯したかのように小さくなっているからだ。

主人公、そんな唯為理をこのままにはしておけない。と思う。

では、ここからなんとか代案を探すわけですが、まず、今は冬なんだよな。

しかもここは、日本でも有数の寒い地域なんですよ。

『じゃあ、その公園で食べようか！』は、冷静に無理なんだよね。

凍死する……なんて事はなくても、寒くて味わかんなくなると思うし、第一ろくに会話もできないと思うわ。

……でも、お弁当は絶対食べたい。唯為理ちゃんの手料理食べたい。そうだ諦めるな。

しよっちゆうすずらん市に遊びに来てる『半・すずらん市民』としての意地を見せろ！

あ。あんじゃん。

ここからそんなに遠くなくて、室内で。

しかも海見ながらご飯食べられる場所。あんじゃん！

〈主人公〉

「……いや。大丈夫」

主人公、前方を見たまま答える。

今度は目が合わないが、その優しく、安心する声音に、唯為理は泣きそうなほどホツとする。

だが、唯為理は思う。

正直なところ、代案があるとは思えない。

たとえばこのまま小湊家か青柳家に戻って食べる、といった事を提案されるのだろうか

……？

主人公さんはドライブやショッピングのつもりで西町まで連れてきてくれただろうに、それも申し訳ない……。

「『どうすれば『大丈夫』になるのか、見当もつかない』
えっ？」

でも、主人公は自信ありげだ。唯為理、キョトンする。

〈主人公〉

「大丈夫。わたし、お弁当食べるのにちょうどいいところ知ってるよ」

「【信じられなくて、少し早口になる。

主人公が気を遣って言うてくれているのだと思ってしまう】

そんな所、あるんですか？」

〈主人公〉

「うん。あるよ。ちよつとかかるけど、いいかな？」

それでも、唯為理には行き先が皆目見当もつかない。
だけど、主人公はニコッと笑っている。

唯為理には、それが嬉しくて、頼もしくて――……。

また、主人公がどんな人かちっともわかっていないまま、好きになってしまふのだった。

「よくわからないが、主人公の優しさが嬉しい」

はい……！ 大丈夫です。行きます。

【涙声で喜ぶ】

そこへ、連れて行って下さい！」

一度フェードアウトする。

※ここでSE14が止まる※

約十分後。

すずらん市にある『すずらん市パノラマ展望台』。

……の中にある、海を見渡せる小さな施設。

主人公と唯為理、施設に入り、二階の自由に飲食できるコーナーへ向かっている。平日であるためか、主人公と唯為理以外の客はほとんどおらず、ほぼ貸切状態だ。

『すずらん市パノラマ展望台』は古くからある観光施設だが、五年ほど前、今主人公たちがいる施設が改修された。

なので『きれい』『人がいない』『市営だから無料開放スペースが広い』『ちよつと来づらいから、無料開放スペース目当ての学生であふれる事もない』という、すずらん市の隠れた名所なのであった。

ちなみに主人公は二十数年前、改修前のここを訪れ、買ってもらったアイスをおろしたてのワンピースにこぼしてギャン泣きした。

……というエピソードがあるのだが、それは唯為理には黙っておく。

SE15 展望台の環境音

【最初から最後まで流す】

【トラック終わりまで流し続ける】

【小さめの音量で流す】

【感激して】

すごい……！　こんな場所、あるんですね」

唯為理、思わぬ展開に大感激している。

主人公が自分の犯したミスを気にせず、許してくれただけで嬉しいのに、こんな素敵な場所にまで連れてきてくれた。

これは主人公が優しく、機転の利く人だからで、たぶん自分以外の人間が同じミスをして、同じようにするだろう……。と、わかっていても、舞い上がってしまう。

『きつと、前にも誰かと来た事があるんだ』『主人公さんはデート慣れしているんだ』と思う事で、気持ちを落ち着けようとする。

確かにその予想は半分ほど当たっている。

でもその時の主人公は、今の半分以下のサイズと六分の一くらいの年齢で、いちごアイスと花柄のワンピースを同時にダメにして、狂ったように泣いていただけなのだが……。

〈主人公〉

「すてきだよね。ここあんまり知られてなくて穴場なんだ」

「【今度は感激で泣きそう】

はい！　すごく素敵です。

こんなに新しくて、建物から海が見れる展望台があるなんて、知りませんでした。こういう所、冬は閉じちやうのかなって思っていました」

〈主人公〉

「そう！　市内の他の展望台は唯為理ちゃんの言った通り、冬は閉めてるみたいなんだけど。」

「ここだけは『冬季は積雪状況による』なんだよね。いいよね！　さ、食べよう？　お弁当、楽しんだっただ」

主人公、唯為理に近くのテーブルにつくように促す。
椅子を引いて、二人、腰かける。

SE16　主人公と唯為理が椅子に座る音

【最初から最後まで流す】

SE17 唯為理がお弁当箱をテーブルに置く音

【最初から最後まで流す】

「【すごく幸せ】

はい！

あつ。食べて下さい。

【だんだん声が小さくなる。自信がない】

お口に合うと、いいんですけど」

そして主人公、目の前に広げられた唯為理のお手製お弁当を見て感激する。
ここまで立派なものを作ってもらえているとは思ってもいなかったのだ。

先日おばあちゃんにも言われた通り、主人公はまるで料理ができない。

料理が得意な人にはいつでも憧れているが、運転免許のようにはいかなかったのである。
多分、前述の女性ミュージシャンが調理器具のCMをしていても、結果は同じだった事
だろう。

〈主人公〉

「すっごい！　おいしそう！」

「**恥ずかしくて早口になる**」

いえいえとんでもないですこんなの誰でも作れるって言うか」

〈主人公〉

「いやいや、そんな事ないよ。だってわたしスクランブルエッグしか作れないもん。では、いただきます！」

あ。唯為理ちゃんを褒めたくて、いらん事言っちゃったな。

しかし事実なのだ。スクランブルエッグなら、二回卵を混ぜるだけだからな！

主人公、いらん自虐をした事を後悔しつつ、箸を持って『いただきます』をする。そして……。

〈主人公〉

「おいしい！」

【嬉しすぎて言葉にならない】

あっ……！？

【泣きそう】

本当ですか？

【ホッとして力が抜ける】

よかったあ……」

唯為理、ほとんど涙目になっている。

わかってる。こういうのが『あざとい』とか『狙っている』と言われてしまうのは。でも出るのだ。こらえる意思はあっても、自分ではどうにもできないのだ。

というか、自力でコントロールできたのなら『あざとい』と言われないうちに、隠れてあざとい事をしまくっているに決まっているじゃないか！

私はこの件で、損しかしていない！

唯為理がこうして、心の中で誰宛かわからない言い訳を続ける中、主人公はもぐもぐと、

嬉しそうにお弁当を食べている。

だって、『血縁者以外から贈られる手作りお弁当』なんて、ときめくに決まっている。もちろん血縁者だってありがたいけれど、『あんな料理できない』からね。

そこで自分が贈る側でも手伝う側でもなく、一方的に受け取るだけのポジションなのは正直申し訳ないが、それよりも嬉しさが勝っている。

ものすごくニコニコしてしまう。

〈主人公〉

「卵焼きも、唐揚げも、すっごくおいしい。唯為理ちゃん、すごいね。いつも作ってるの？」

「【ものすごく緊張しながら答える】

あ、はい。おばちゃんもすごく上手なんですけど。

今は私が料理してます」

〈主人公〉

「そうなんだ。料理ができる人って憧れます。尊敬しちゃう」

唯為理、嬉しくて真っ赤になる。

「すごく謙遜して」

いえいえそんな。

【でも謙遜ばかりではいけないと気づき】

でも、嬉しいです。すごくホツとしました」

〈主人公〉

「唯為理ちゃんも食べましょう？　って、わたしが作ったんじゃないけど」

「【忘れていた】

あつ。そうですね。いただきます」

SE18　唯為理が箸を持つ音

【最初から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

「【食べている】※食べるフリ（租借音っぽいものを出す）でOKです
もぐもぐもぐ……」

8秒ほど沈黙。

二人、黙ってお弁当を食べる。
すると……。

〈主人公〉

「あの」

「ドキドキと切り出す。主人公と声が重なっているイメージで」
あの。

【少し間をあけてから。譲ろうとする】
被っちゃいましたね。どうぞ」

〈主人公〉

「いえいえ。唯為理ちゃんからどうぞ」

主人公、いい雰囲気に乗じて、例の件について話そうとする。

しかし、唯為理にも話したい事があるようだ。譲る事にする。

「【驚く。そう来るとは思わなかった】

わ。わかりました。では私から……。

【少し間をあけてから。ドキドキしながら切り出す】

あの、一つ確認させていたただきたいん、ですけど」

〈主人公〉

「はい？」

主人公、何を聞かれるかおおむね察してはいるが、気づいていないフリをする。
今日はこのパターンが多い。

「【ものすごく気まずそうに】

私の仕事の事って、どの位ご存知なんでしょうか……。」

〈主人公〉

「けほっ」

やっぱりそれか！

SE19 主人公が箸を落とす音

【最初から最後まで流す】

【本来よりも、大きめの音量にする】

【本来よりも、少しスピードを上げる】

【大げさな印象にする】

主人公、動揺のあまり、むせ、箸をテーブルの上に落とす。

それはあまりにもわざとらしい『箸の落とし方』で『コントか？』『ほんとにこんな人いるんだ！』みたいな落とし方である。

落としたのがテーブルの上でよかった！

「主人公が箸を落としたので驚く」

あっ……！ 大丈夫ですか？」

SE20 主人公が箸を拾う音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「大丈夫大丈夫。あーそれはえーっと」

主人公、慌てて箸を拾って取り繕うとするが、時すでに遅しである。
これでは『もちろん知っています』と言っているのと同じだ。

【ものすごく申し訳なさそうに】

大丈夫です。今ので、わかりました。

【ゆっくり、それでも必死で説明する】

あの、知られるのが嫌だ、とかじゃないので。

【自信がなくなってくる。声が小さくなる】

ただ女の人はいあまり、馴染みがないと思うので。

【元の速さに戻る。声は小さい】

もしかしたら今日も、無理して来てくれたのかなって、思いまして……」

〈主人公〉

「えっなんで？」

主人公、食い気味に返事をする。

唯為理の意図するところがよくわからないからだ。

対する唯為理も、主人公の事がよくわからない。
だって……。

「『えっ、だって』がくつついて『えっだって』になる。
『どうして、なぜと質問するの？』という感じで」
えっだって。ご存知、なんですよね」

〈主人公〉

「……はい」

「私が描いてるのって、

【すごく言いづらそうに】

成人、向けの。

【声が小さくなる。ますます言いづらそうに】
えっちなやつ、なんですけど……」

ああ……そっか。そういうふうにかえていたのか……。
じゃあ、一層、伝えなきゃだめだな。

〈主人公〉

「あの。その件なんですけど」

主人公、意を決して、自分のスマホを差し出す。

SE21 主人公がスマホを差し出す音

【最初から最後まで流す】

「少し混乱して。主人公が何をしたいのかわからない」
え？

【少し間をあけてから】
スマホが、何か？」

主人公、唯為理の目の前でスマホを操作し、とある画面を見せる。

作品の販売ページじやなりすましができてしまうから、マイページだ。

と、ここで主人公、もしかすると唯為理たちは自分の名前を知らないのではないか、という可能性に気づく。

昨日は、名乗るほどのものでもないだろうと思って、特に伝えなかったのだ。なので、ポケットからパスケースを出して、中の運転免許証も一緒に見せる。

〈主人公〉

「これ。わたしです。この『あおブルー02』って人。

これ、わたしの書いたレビューです。

『佐々木葵』と『あおブルー02』。名前似てるでしょ」

「信じられない。それでも声は大きくない」

えっ………！

【少し間をあけてから。頭がフリーズしている】

このレビュー書いてくれたの、あなただったんですか………!?」

おうよ。

レビューア―名なんて全然考えてなかったから、『あお』にしようと思ったんだけど、これじゃダメで。

『じゃあ同じ事二回言ったれ!』と思って『あおブルー』にしたらまだダメで。

『あおブルー01』ならいけるだろう! と思ったらそれでもダメで。

『あおブルー02』にしたらようやく承認されたんですよ。

しかし、恥ずかしいな。他に方法がないとはいえ『自分の文章を読んで下さい!』なんて。

……いや、わたしは、本当は読んでほしかったのだ。

作家さんに見てもらえなくなっていたいいなんて、嘘。

遅くまで頑張ってる『松雪 ほたる』さんを、何らかの方法で応援したかったのだ。

主人公、照れつつも、はつきり言う。

〈主人公〉

「はい。パッション詰め込みました。

……唯為理ちゃんと出会う前からだったとはいえ、おばあちゃんに一方的に色々聞いて、

勝手に作品読むなんて、嫌だよね。ごめんなさい。

……でも、すごく面白かったです。何て言うんだろ。

……ドキドキした！

だから、それを伝えたくて書きました。こうして作家さんご本人に伝える事になるとは思ってたけど。

だから、今日むしろ、すごい楽しみだったっていうか。

この事、ほんとと言うつもりはなかったけど。

わたしは唯為理ちゃんがどんな人か、すごく気になってたっていうか。お話しできるのが楽しみだった。

だから、無理なんかしてないよ。わたしは、普通にあなたに会いたくてここにきてる」

唯為理、頭がショートしそう。

まさかこんな事になるとは、つゆほども思っていなかったからだ。

確かにレビューの投稿タイミングは、よすぎるほどだった。

でも、唯為理は主人公の名前を知らないから、レビューアーネームから『主人公かもしれない』なんて、予測できるはずがなかったのだ。

「言葉にならない」

あつ。あ……。

【少し間をあけてから。なんとかしゃべる】

これ、今朝見つけて。

【泣きそう】

すごい嬉しくて……。

【何とか伝える】

スクショして、今日のお守りにしてたんです」

〈主人公〉

「お守り？」

「【涙声で何とか伝える。話し方がゆっくりになる】

……はい。こんな風に」

SE21 唯為理がスマホを差し出す音

すると、今度は唯為理がスマホを見せる。

販売ページの方のスクショを、主人公に見えるようにする。

「今日あなたに、お仕事の話、する時。」

【想像するだけで怖くなる】

ひ。引かれても、大丈夫なように。

今日うまく行かなくても、頑張れるように……。

【少し間をあけてから。ほとんど泣いている】

でも、あなただったんですね。

【声が震える】

あなたがこんなに、応援してくれてたんですね……。」

唯為理、もうほぼほ泣いている。

だが、唯為理の事をよく知らない主人公は、唯為理が『何かあればすぐに感極まって泣く女』である事を知らない。

唯為理はよっぽど、自分の職業の話をするのが不安で、怖かったのだろうと判断してしまふ。

可愛いなあ、この子。

もしもわたしのせいで不安を感じているなら、それを、ほんの少しでも取り除けたらいいなあ。

……そうだ。

主人公、これならいける。と判断して、ダメ押しをする。
そのために、わざわざスーパーに寄ってきたのだ。

〈主人公〉

「……うん。てかね、引くどころか、むしろぐいぐい行きたいんですけど」

【主人公の意図するところがわからない】
へ？」

主人公、言いながら、鞆に入れていたサイン色紙を見せる。

このために今日は、色紙サイズまで隠せる、ドデカ鞆できたのだ。

〈主人公〉

「サインしてほしいんですよ……」

SE22 主人公が鞆から色紙を取り出す音

「信じられずに、驚く」

サイン!？」

主人公、唯為理のリアクションがあまりにも大きいので驚く。
主人公はまだ、唯為理がとにかくすぐびっくりして、すぐおびえて、すぐ真っ青になつて、すぐ泣く女である事を知らない。

〈主人公〉

「あ、まずかったかな。

なんかそういうのって、出版社さんからダメとか言われてる？
即売会とかでも、OKな人とダメな人がいるんでしょう？

わたしそういうのは行った事なくて。失礼だったらごめんなさ、」

「【食い気味に】

いいえ。書きます。嬉しい。ありがとうございます……!」

唯為理『主人公さんは、たぶん、イベント会場における大勢の人に対するスケブと、プライベートで、一枚だけ書くサインを混同してる』と気づく。

つまり、主人公さんはそのくらいの知識の人なのだ。

今時、容姿ではどの程度のオタクかなんて、判断できない。

だから、測りかねていたが……。主人公はおそらく『平均より上位の漫画好き』程度で、成人向けの漫画や、同人系の作品には、そこまで知識も、慣れもない。ないなりに、自分の事を理解しようとしてくれたのだ。

こんなの。

こんなの……。

〈主人公〉

「ほんと!? やったあ! あ、お礼はもちろんしますので」

好きになると思う。勝手に好きになっちゃうくらいは、許されると思う……。

「【少し早口で、必死に】

いえいえお礼なんてとんでもないです。そもそも助けてもらったのは私なんで……」

主人公、応じてもらえて、顔がほころぶ。

唯為理はそれを見て、胸がときめく。

しかも次の瞬間、主人公は何に気づいたのか突然『ハッ!』と真顔になるものだから、ますます意外で、面白くて、好きになってしまう。

〈主人公〉

「いやでも、自分から言い出しておいてアレなんだけど。

偶然知り合いになれたからと言って、タダで書いてもらうっていうのは、やっぱり他のフアンの皆さんに申し訳なくなってきたというか……。

冷静に図々しすぎるなというか……」

「【明るく、かわいく、少し笑って】

あはは。

【少し間をあけてから。少し声が明るくなる】

そしたら。やっぱりお願いしてもいいですか」

〈主人公〉

「なんでもどうぞ！」

今度は何度もコクコクと頷く主人公を見て、唯為理は笑顔になる。

素敵な人だなあ。明るくて、優しくて、気取ってなくて……。

お仕事辞めたばかりって言ってたけど、その時もきつと、皆に惜しまれながら辞めたんだろうなあ……。

主人公が唯為理の事を何も知らないように、唯為理もまた、主人公の事を知らない。

主人公がどのような経緯で職場を去ったかなんて、知るはずもない。
だから……。

【緊張しているが、声は明るい】

よかったら、また。お話ししたいです。こっちにいる間だけで、構わないので。
あっ……会って、欲しいです」

〈主人公〉

「あ、そんなんでいいの？」

「照れるが、はつきりと」

そんなのが、いいんです」

唯為理、主人公がポカンとした顔を浮かべ、それからホツとしたように笑うので、ときめく。

その次の瞬間、今までよりちよつと大きな声でこんな事まで言うから、ますますドキドキする。

〈主人公〉

「よかったー！」

やばい。私、もうだめ。この人の事好きになっちゃった。

年上さんなのに、ちゃんとお姉さんなのに。

何度もさらっと助けてくれて、すごく格好いいのに。

時々不思議な格好してたり。と思ったら、今日はすごいおしやれで。

素敵な車、自然に運転してたり。

突然些細な事で真顔になって、真剣に悩んでたり。

こんな風に小さい女の子みたいに笑って、ギャップやばくて。

すっごい、かわいい……。

今見えているものがすべてのまま、二人は距離を縮めて行く。

学生時代、近くの席になった子と初めて話して、これから仲良くなれる未来を期待するみたい……。

物理的にも、精神的にも、近づいて行く。

〈主人公〉

「わたしなどでよろしければ。

さつき佐智さんに言った通り、こっちにいる間、めっちゃ暇だし……。こちらこそよろしくお願いします」

【緊張しているが、声は明るい】

あつ、後。もう一つだけ……」

唯為理、スマホを手を持つ。

主人公、何をお願いされるのかおおむね理解しつつも、嬉しい。

今の自分と、連絡を取りたいと願って、本当に会おうとしてくれる人がいる。それが、とても嬉しかったのだ。

〈主人公〉

「はい。なんでしよう」

「【精一杯勇気を出して】

連絡先。教えて下さい！」

ここでフェードアウトして終了。